

# 理論と実践の統一のために

星 野 彰 男

学問研究の目的は《真理の探究》にあると私は考える。したがって、真理の内容をどう規定するかはしばらくおくとして、真理の探求とそれにまつわる諸問題が私にとっての学問研究の《現実》であるといえることができる。同時にそのことは、単に学問研究の上だけでなく、学問研究を現実に行っていると感じている私自身の生活《現実》でもある。だから私にとっては、学問研究の現実と生活上の現実とが乖離するか否かという問は無意味である。私が真理の探求という学問研究上の現実を自覚しつつ意識的に生活しているからには、生活現実そのものがまるごと学問上の現実と一体化せざるをえない必然性をもっているのである。むしろ私にとっての問題は、自らの現実としての真理の探求、自らの学問と生活を一体化させる媒体としての真理の探求というものがどういう性質と内容のものであるかということである。

学問上の現実と生活上の現実とが一体化せざるをえない必然性は、前者における真理がまさに後者の諸要求を満たすべく探求されるべきものとしてあると同時に、後者もまた前者の要求である学問の真理性を検証し、確証するものとして存在しなければならないというところにある。学問上の真理探求の対象としての歴史的社会的論理過程が、人間の様々な生活実践によってもたらされ、一種の合成力として貫徹されながら、生活上の真理としての倫理に指針を与えるだけでなく、逆に日常の生活実践そのものが学問として把握された論理の真理性を確証し、実践によって検証されながら論理が豊富化されていく

ものとして、論理と倫理・理論と実践・科学と思想は統体的に媒介されている。学問上の真理が真理性をもって把握されたものとしての論理＝理論＝科学は、生活上の現実における真理としての倫理＝実践＝思想とは、あくまでも峻別されなければならないことはいうまでもない。ウェーバーの方法論はこの峻別を意識的に行ったところにその歴史的意義があると考えられる。この両者が直接無媒介に混同されたり、一方が他方に歪められたりすることを回避するためのこの峻別を確認した上で、先述のようにこれらの二つの契機がそれぞれ統体的に媒介されるものとして存在せざるをえない必然的相互関連にある以上、このことは単に私個人の内面において統体的に媒介されているのみならず、およそ真理探求を自らの理論問題・思想問題として行ったもの、行おうとするもののすべてについて妥当すべき一つの客観的事実とみなされうるのであろう。したがって、私にとっての学問上の真理探求とは、空間的・時間的な一切の人間生活における諸々の実践＝倫理が大きな合成力として論理過程の中に組み込まれたものとしての論理の探求であり、主体的実践が客体化されたものとしての客観的理論の探求であり、人間の諸思想がいかに歴史の流れの中に位置づけられつつそれを規定しているかという意味で思想が対象化されたものとしての科学の探求であり、総じて人間主体が客体化されたものとしての超主体的な歴史と社会の論理の追求を意味する。それとともに私にとっての生活上の真理探求とは、論理が倫理化されたものとしての倫理、理論が実践化されたものとしての実

践，科学が思想化されたものとしての思想，総じて客体の論理が主体化されたものとしての主体性の確立を追求していくことを意味する。

理論と実践の統一は原理的にはこのように理解されねばなるまい。従来，この言葉はひんぱんに用いられながら，もっぱら後者の意味，つまり理論が実践に適用さるべきものとして，科学がイデオロギーに従属せるものとして，一面的に理解されてきたきらいがある。しかもこのことが逆に実践から全く遊離した理論，イデオロギー不在の科学という他方で的一面性に存在理由を与え，この傾向を助長してきた。このような一種の偏向にたいして，私は前者の意味での理論と実践との統一，つまり人間の主体的実践が客観的歴史過程の原動力となり，その中に組み込まれたものとしての理論の探求がもっと意識的になされる必要があると考える。実践そのものを対象として理論化するというこの問題意識が欠如するとき，主体なき客体の論理把握という客観主義，思想なき空虚な科学，実践なき理論のスコラ学が生じうるし，事実，現在のように各分野の社会科学において人間不在の技術主義・客観主義が支配することになるのである。本来，社会諸科学の分化は人間の生活現実の諸領域の分化に根ざしたものである以上，社会諸科学はそれぞれ人間の社会的実践を分析の対象としてその根柢にもっているし，それを理論化しなければ科学としては存立しえないはずである。たとえば，人間の生存のための生産＝消費過程を他の諸活動から思惟の上で分離して，生産の領域での人間活動を対象としその論理を追求するところに経済学が成立しうるのである。また人間の歴史の発展は自然成長的に進化するものではなく，人民大衆が歴史の発展を促すものとして，歴史の真の創造者として歴史の探究がなされるべきことを説いたマルクスは，人間の歴史を正当にも「階級闘争の歴史」として扱ったのである。哲学の分野で人間の主体性が自覚されるようになったのも人間が自力で自

然や社会の法則を規制しうるようになった近・現代に至ってからである。これらのすでに18～19世紀に解決済みの諸問題が現代の社会諸科学において意識的に展開されていないどころか，むしろ人間不在の客観主義，実践を内包せずそれから遊離した理論のスコラ学が生じているところに問題の現実性があるといわねばならない。

理論の分野での客観主義は，逆に実践の分野での主観主義を，あるいは実践にたいする全くの無能力と無関心を示さずにはおかない。なぜならば，客観的現実の論理探求において，人間の主体的契機＝実践が組み込まれているものとしての歴史的社会的過程が論理的に把握されていないような，いいかえれば無内容な形式としての論理形式のみを対象とする論理至上主義は，他面での実践の指針としての論理が実践に根ざさないものであるがために，実践とそれによって働きかけられる現実的世界から遊離した公式としての論理によって実践が導かれるという実践面での公式主義，あるいは，論理が実践に全く無力であるため実践の根柢が論理に基礎づけられず，客観性の全く保証されない主観主義が発生しうるからである。

現代において人間の主体性を論理化しえない社会科学・哲学はもはやその社会的妥当性を是認されない段階に来ている。現存の思想家としての毛沢東・ルカーチ・ルフェーブル・サルトルらはいずれもかつてこのような観点から既成唯物論の一面性・不十分性を克服しようとし，あるいはそれについて問題を提起している。また現実世界においても大政治闘争がなされつつあることと表裏一体をなして，理論上・思想上の大論争が全世界的に展開されつつある。いやしくも真理を探求しようとするものが，かくも大きく激動している世界の中で自らの理論的思想的立場を不断に自己批判し，主体変革しながら一步步々と確固たる主体性を確立しようとする努力をせずには，いかにして真理を見通すことができるであ

ろうか。既成の理論・思想体系に安住し自己反省の意識を失うものは、現実そのものからとり残され、真理探求者としての資格を喪失していくのである。このような問題意識から不断の自己変革を行うべく、私は社会科学と思想の歴史を追思惟することによって、理論的認識と思想的立場の深化と社会科学徒としての自己の主体形成を当面の課題としている。

社会科学の歴史の中で理論と実践の媒介的関連を意識的に追求し、学問的にそれを展開した古典的業績として、経済学の分野では現象の背後にある内的関連のあくなき探求を試み、労働に基礎づけられた理論とそれによる現実社会への実践的指針を提示したアダム・スミスの古典派経済学を、哲学の分野ではカントの批判哲学における主観と客観の二元論とその分析的認識の一面性を批判することによって、主体＝客体の媒介の論理を抽象的实践に依拠しつつ展開したヘーゲルの弁証法をあげることができる。マルクスはこの両者を超克することによって、唯物論に徹した理論と実践の弁証法的相互関連をかれの全体系の基礎に据えた。古典派経済学やヘーゲル哲学はこのような観点から、あらためて社会科学の歴史の中に正当な位置づけのなされる必要がある。これは単に過去のものとして見過すにはあまりに大きな影響を現代の世界に与えているということによるだけではない。これらの古典的文化遺産をいかに継承し、どう克服しているかということが現代における思想と科学のあり方の根柢を規定し、かくしてわれわれ自身の問題として現実提起されていると考えられるからであって、決してもはや解決ずみの問題とはみなされないものである。

第二次大戦後の一時期に日本でも唯物論における主体性論議が活発に行われ、この問題意識から価値論や弁証法の研究がなされたことがあった。当時の主体性論にみられる一つの限界は、主体性をフォイエルバッハの自然主義の枠内で論じたために現実的

な社会関係から遊離した自然対人間の抽象的な主体性論議に終始したという点にある。われわれが主体性の問題を論ずるばあいに注意しなければならないことは、それを抽象的に論議するのではなく、第一に人間の主体的実践活動がどのように具体的な社会諸関係をもたらしめているかということと、第二に具体的な社会諸関係の中での人間の主体的実践活動はいかにしてあるかということ、これらの二つの意味での理論と実践の統一的関連の中で人間の主体性ということが論じられねばならないということである。最近の中国の思想界でも唯物論における人間の「主観的能動性」という問題が盛んに論議されているが、その論議の方法が具体的な社会関係の中での人間の主体性を論じているという意味で極めて示唆に富むものである。

さて、上述のような学問上の現実と生活上の現実との相互媒介的関連の中で、真理の探求を行っていくとする一学徒にとって、学問上・生活上の真理がどのようにしてその真理たる所以を証明されるのであろうか。真理がその真理性を保証されうる基準は一体何であろうか。一方が正しく他方が誤っているとす価値判断がいかにして独断をまぬかれて社会的客観性を保証されうるのであろうか。《人民のための科学》が真理であるとしても、何にもとづいてある学問が人民のためか否かを認識しうるのか。これらの点についての社会科学的方法を模索する過程が真理探求の一環として組み込まれ、真理探求そのものの中で真理の内容を豊富化していくということをつうじて確立され、体系化されるべきものとしてありながら、真理の内容とは区別される独自の課題として真理探求を行うに当たっての不可欠な前提条件とみなされるのである。

このような社会科学的認識の反省を行うにあたって原理的な出発点を過去の文化遺産の中に探るならば、やはり17～18世紀ヨーロッパの経験的自然法思想とヘーゲル弁証法の継承と克服の問題が不可避の

課題として提起されている。これらの思想はいずれも人間の主体的活動を根源に据えながら、それによってもたらされる超主体的な歴史の客観法則の存在を認め、経験と推理による客観法則の探求を試みた代表的な近代思想の流れに属している。すでに指摘したが、これらの文化遺産をどう継承し、いかに批判・克服しているかに現代の社会科学・思想のあり方が不可分に関連している。たとえば、マルクス主義・プラグマティズム・実存主義等の現代の代表的諸思想は、いずれも18～19世紀のヨーロッパ近代思想を継承・克服したものであるが、それらの根本的相違は近代思想にたいするそれらの継承・批判の中に明確に浮彫されているのである。

過去の近代思想にどのような態度をとるかということは、それを歴史的に生み出した人間や社会にたいしてどういう態度をとるかということと密接不可分の関係にあるし、現代の中に生きている近代思想やそれを支える意識上の根源、あるいは社会的な根源にたいしてどういう態度をとるかという問題でもある。このような問題意識をもって過去の理論や思想を学問するということは、決して単なる過去研究には終りえない生々しい現実性を帯びてくるであろう。まず何よりも、それは学問主体自身の自己意識にたいする対決を迫られなければならないし、さらに近代思想を共通の基盤としている現代諸思想とその担い手にたいする対決を、さらには現代世界に残存している近代的潮流とその担い手にたいする対決を迫られずには一歩も進むことができない。しかもこれらは現代における諸々の理論的・思想的対立とそれに並行した政治的対立を表現しており、これらにたいして対決するということは、これらにたいし何らかの理論上・思想上の態度表明をなすことを意味するであろう。これらの諸々の対立の中で何が正しく何が誤っているのかにたいして生活体験による個人的・実感的な価値判断を行うことは容易であるとしても、それだけではその価値判断の歴史的・社

会的客観性＝真理性は少しも保証されたことにはならない。

真理の真理たる所以が自然科学においては実験によって証明されるように、社会科学にあっては歴史的社会的実践の検証によるのほかはない。ここに理論と実践の相互媒介的関連と理論にたいする実践の優位性の根拠が存している。それゆえ、社会科学にあって真理を根源的に明らかにするには、社会史・理論史・思想史すなわち全世界史の過程が一つ一つ人類の歴史的行為によって検証されてきた試行錯誤の過程として総括されることが必要であろう。過去の偉大な社会学者は、スミス・ヘーゲル・マルクス・ウエーバー等いずれも世界史の総括を生涯の事業としてきたのであった。われわれがこれを今独力ですべて行うということは不可能だとしても、われわれのなしうることは、このような共通の問題意識のもとに各専門分野毎の分業による協業体制を組むことをつうじて世界史の総括を多面的に行っていくことであろう。私はこのような観点から、とくにヨーロッパの近代から現代にかけての社会科学上の思想と理論の歴史を、自然法一弁証法一価値論というところに焦点を置いて、局部的ではあるがしかしもっとも始源的なところでの総括を行おうとしているわけである。この過程で現代の日本における思想と科学がだれのためにどのような内容のものとならなければならないかということが自ずと明らかにされるであろうし、《人民のための科学》の実体も明確にされるであろうと確信している。

科学者の社会的責任の問題も科学者が真理を探求することのうちに責任が全うされねばならないのであって、真理を追求しようとししないもの、あるいは真理を明らかにすることをおそれ、妨害すらしやうとするものこそ、その社会的責任の所在を問われなければならない。同時にそればかりでなく、現代の社会においては真理を追求すればするほど、その成果の利用如何によってはかえって逆に無責任に陥る

という矛盾が、とくに自然科学において顕著に現われている。社会科学でも最近、中国・東南アジア研究の分野で他国の資金供与拒否運動をつうじて科学者の社会的責任の意識が明確に自覚されつつある。このように真理の探求をつうじて科学者がその社会的責任を果たすためには、一方では真理探求を保証す

る研究条件と研究体制が、他方では学問成果が真に平和と人民のために生かされるような社会体制が築かれねばならないであろう。しかもこれを行うことがまた私のいう生活上の真理探求の一環として位置づけられることになるのである。